

# 低学年における論争問題学習の意義

岩坂尚史（お茶の水女子大学附属小学校）

## 1 はじめに

### （1）問題の所在と研究の目的

近年、人口知能の急速な進展を迎えている。その要因として「どの特徴に注目して情報を取り出すべきか」に関して、人間の手を借りなければならなかったことを、ディープラーニングという方法で機械自らがその特徴を学習することができるようになったこと等があげられるという。しかし、まだ人工知能でも難しいとされるのが、「快」「不快」「きれい」等の長い進化の中でつくり上げられた本能と密接に関連している概念を理解すること、伝え合う際の生得的に埋め込まれている文法表現を理解することなどが挙げられるという。

高学年の社会科で、社会的論争問題を学習材にしたとき、様々な決定は社会的な事実や根拠に基づいて行われるべきであるが、一方で、論理的な根拠な妥当性のみが判断材料ではなく、個人的な利害や感情といった情意的な根拠も関わってくる。その対立する当事者らが何を大切にしているのか等人々の心情や価値観をくみ取ったり、それを判断材料にしてよりよい決定を模索したりすることは人口知能では難しく、このような資質能力は重要になってくる。

水山は、社会科授業が意思決定や合意の対象とする社会的論争問題は、その構造が複雑でコストのかかるものが多いので、合意を構成する要素として「時間」と「手間」を設定している。合意を追究していく活動は、「基本的方向の確認」「価値判断」「討論」「基本的方向の確認」と繰り返し、A、Bの相違点、つまりなぜ合意ができないのかを明らかにしていくことであると述べる。合意形成過程においては、粘り強く対話を重ねることが前提となるだろう。

以上から、これからの民主主義社会の形成者に求められる資質・能力は、丁寧に対話を繰り返しながら、自身の本音を語ること、他者の声に耳を傾けること、相手の主張の真意を読み取ること、粘り強く考えること等が出来るように丁寧に対話を繰り返すことだと考える。

### （2）研究の方法

本校では、3年生以上で新教科「てつがく」を創設し、自明と思われる価値やことがらに対して問い直し考え続ける“てつがくすること”を教育課程全体で位置づけてきた。低学年では、クラス全体が輪になって座り、生活の中で経験したことなどを伝え合うサークル対話を日常的に行い、自分の思ったことや感じたこと、疑問などを素直に表現できるようにしている。さらに、授業者は、日常の生活の場面でそれぞれの考えの違いにより対立している問題を、人形劇を通じて間接的に、時には直接取り上げている。このように、対話を繰り返し、考え続けることを通して上記の資質・能力を育むことができるようにする。

## 2 具体的な実践事例～具体的な対立について考える「カーテンを開けたい！閉めたい！」（2019年1月実施）～

### （1）題材の概要

冬によく晴れた日、校庭側の子どもたちは、カーテンを閉めたがる。太陽の光がよく差し込みまぶしいということ、窓際に暖房器具があるということもあって暑いということが主な理由である。対して、カーテンを開けたいと主張する子どもたちは、オープンスペースのため廊下側から風が流れ込み寒いということや、カーテンを開けた方が、明るい・暖かい・外が見えて

開放的等と主張する。このように、人それぞれの感じ方により、主張が違う対立を子どもたちの対話の場に持ち込んだ。

## (2) 授業の履歴

(0時...11月頃から、授業者はそれとなくカーテンを閉めるか閉めないかを話題とした。)

1時...カーテンの開け閉めにおけるメリットデメリットを整理する(1時間)

2時...カーテンを開けるべきか、閉めるべきかを話し合う。(3時間)

3時...自分自身の考えを記述する。(1時間)

(3) 授業の実際～粘り強く対立に向かいお互いの真意を聴き合うために～

### ①「相手を説得してみよう。」

資料1を見ると、C1児は、1校時から2校時は開ける代わりに、それ以外はどのようにしてもいいと留保条件を意識した発言をしている。しかし、C2児の発言のようにカーテンを閉めたい子達の本心は、「陽がよく差し込む時にこそ、カーテンを閉めたい」である。条件を出して、説得しようとする事により、相手の主張が表出することとなった。

### ②「困っている人誰だろう。」

粘り強く対話を続けることで「陽が反射して黒板が見えにくい」「目がチカチカする」は、「困っている」と共通理解された。「暑い」についても「困っている」と考えている児童が多く、残すところ「寒い」と答えた3人をいかに納得させるかという段階まで話し合いが進み、1つの終着点にたどり着きそうだった。しかし、資料2のように、3人のために少しカーテンを開けてあげるなどを提案すると、子どもたちの全員が、納得がいかない様子を示した。手順としては受け容れられることでも、感情的に受け入れられないという社会生活を送る上で避けては通れないことが垣間見えた。

## 3 成果と課題

普段から子どもたち同士が対話を重ねることにより、粘り強く対立に向かい、考える姿が見られた。その中で、留保条件を提示する姿、自身の主張をしっかりと伝える姿が見られたのは成果の1つと言える。一方で、自身の主張をする際に、相手を慮る主張が出来なかった、つまりコミュニケーションの取り方に難があるが故に、「わかってはいるが、何かヤダ。」と反論する姿も見られた。相手をいかに納得させるかという面での授業作りも必要である。

### 【参考文献】

松尾豊(2015)『人工知能は人間を超えるか～ディープラーニングの先にあるもの～』KADOKAWA

水山光春(2003)『「合意形成」の視点を取り入れた社会科意思決定学習』全国社会科教育学会第58号

C1:…1校時から2校時はあけて、3校時から5校時は、ぼくは好きにしてい

T「なんで？」

C1:…「さっき言ったように体に陽があたると気持ちいいから。」

T…陽を浴びたいんだ。なるほど。今のはどう？ちょっと納得出来るそう？

CC…全然。

T…絶対にできないの？閉めるって言ってんじやんなあ。開けたいのに。

C2…そちらが開けたい時、こっちが閉めたい。

### 資料1 主張の真意が明確になった場面

T…こっち(カーテンを閉める)が困っている人が多いから基本閉める方向で。でも、その中では、ちょっと我慢してくれた人もいるよね。そのために、ちょっと何かをしてあげる。例えばちょっと開けてあげるとか。

CC…うん。

T…それで決まりではない？

CC…ない！

T…それで決めていいと言う人？(シーン)

T…それで決まらないと言う人？(全員挙手)

### 資料2 納得がいけない姿